
■ さろん | Mail News 2018/2/15 | #109 ■ 【読み物号】

ご案内不要の方はお手数ですがこのメールにそのままご返信ください。

哲学カフェ及び関連イベント情報をお送りします。みなさんの興味・関心の一助としていただくとともに、今後とも「さろん」を応援いただければ幸いです。

なお、このメールニュース掲載のコラム等は執筆者の個人的な考えを表したものです。会や専門領域における統一見解や事象を扱っているものではありません。予めご了承ください。

====Vol.109 2018年2月15日(木)====

さ | ろ | ん |

— — —

M | a | i | l | N | e | w | s |

— — — — —

<http://salon-public.com/>

(バックナンバーはHPからご覧いただけます)

<https://twitter.com/salontetsugaku>

<https://www.facebook.com/salontetsugaku/>

INDEX

- | 【お知らせ】(2/22) Café トーク de ゆるみん / テーマ: 「脱学習と楽しさ」 or 「(当日募集)」
 - | 【1】 コラム / エッセイ
 - ◇ 『救いのない痛み ～思考実験小編』
 - ◇ 『もう歩き出している。』
 - | 【ご案内】「さろんラボ」企画を募集しています
 - | 【2】 コトバをハーバリウムする
 - | 【3】 さろんアーカイブの遊歩道
 - | 編集後記
-

CONTENTS

【お知らせ】

(2/22) Café トーク de ゆるみん

テーマ: 「脱学習と楽しさの関係について」 or 「(当日募集)」

通称『ゆるカフェ』。あいかわらずゆるゆると営業中です。

今月のテーマは「脱学習と楽しさの関係について」or「(当日募集)」。

あまりテーマを意識しすぎず、おしゃべりしたいテーマをぜひ持ってきてくださいね。それもいいね、そっちも面白そうだね、とウロウロしながら、「いま話したいこと」の中心をゴリゴリとほりさげてみましょう。

2月22日(木) 19:15 オープンです。

今月も例によって例のごとく少人数で集まって、ゆったり考えたり感じたり聞いたりしてみます。ゆるっと奏でる月イチのセッション、お気軽にいらしてください。

定員5名まで ※最少挙行人数3名

2月22日(木) 19:15 - 21:30頃

代々木近辺の喫茶店(申込者にご案内)

参加費100円(別途、注文した飲食費実費をお支払いください)

お申込み: salontetsugaku@gmail.com

(幹事: せりざわ)

【1】コラム/エッセイ

- | | |
|--------------------|--------|
| ▽【救いのない痛み ～思考実験小編】 | 加田零 |
| ▽【もう歩き出している。】 | セリンジャー |
-

▽【救いのない痛み ～思考実験小編】 加田零

なぜこんなことになったのか。目の前には、腹の辺りで体が真っ二つに分かれてしまった男が顔を歪めながら、苦痛に耐えている。私は幸いにも体は無傷で、どこにも痛いところはない。周囲を注意深く見渡すと、その真っ二つの男の他には私しかいない。ここは戦場で、男と私の二人だけが孤立してしまって、援軍もすぐには望めそうもない。

男が何か私に話かけている。「その拳銃で一思いに殺してくれ」。男が指す先には拳銃が落ちている。彼の持ち物だろうか。当然私は拒否する。「それはできない。どんな条件下でも、仮に苦痛から逃れるためでも、人を殺すことは絶対許されないのだ」。

男は繰り返し私に懇願する。「どうせ私は助からない。この救いのない激痛は死を超える悪だ。この劇痛から逃れることができるなら死の方がまだ。頼む……」。劇痛は男を間断なく襲うようで、耐えられないようだ。もちろん鎮痛剤の類も周囲にはなく、彼がいずれ死んでしまうことは間違いのないささうだ。あなたが私なら、どうするだろうか？

▽【もう歩き出している。】 セリンジャー

夜明け前のまだ暗い時間、窓ガラスに映りこんでいるじぶんの姿をまじまじと眺めている。もう長いことよく知った顔で「吹き出物が昨日より赤く目立つな」とか「今朝はずいぶん顔がむくんでるな（ゆうべ飲みすぎたせいだ）」とかおもう。目の下のクマが冬眠から覚めて腹を空かせてるのにおののき、睫毛がクーデタを起こしてるのを漸次穏便に収束させ、今朝も物見遊山に繰り出してる鼻毛には御成敗式目に則って粛々とした対応をとる。細かいけれど放っておけないアレやコレや嫌でも目について「やれやれ。またか」と飽きがかかるほど。コイツのことならなんでもわかっているような気がするの、ほかの誰よりも前の日のじぶんを知っているからだろう。でも、二歳の時のじぶんを一番よく知っているのはわたしではないほかの誰かである、ということもきちんと理解している。

見飽きた相貌体躯の「Funky fresh！」でないじぶんがなんら特段の興味をひかないからこそ、髭や肌理感のような生体部分——常に変化し続ける“自然”の部分——から真っ先に変化を知覚することになる。それにくらべれば人間の“内面”はつかむのが難しい。難しいくせに、なのになんでもわかっている「ような」感覚。わたしは〈わたし〉のことをおそらく誰よりもよく知っているが、決して全てではない、ということ。だからこそ、未知のじぶんに出会ったときには戸惑い、焦り、ときとして落ち込むこともある。

性格診断の本では〈わたし〉はこんな風に分析されたりしている。長所は「みんなの期待に応えようとする素直さ。芸術や美に対する研ぎ澄まされた感性」。弱みは「弱音が吐けず、目標達成のルールで自分をしばりがち」。「固く自分の感情を閉ざし」「苦しいときに苦しいと言え」ないし、「そもそも苦しいって何？とさえ思」うような性格。

会ったこともないようなどこかの誰かに言われた言葉に「ヤバみ。指摘されてみるとけっこうそうかも……」と深く頷かされてしまう、吹けば飛ぶような薄っぺらい《じぶんのことはなんでもわかっている》感。そう考えると、「無知の知」と力強く宣言したのがどれだけすごいかわかるような気がする。——という、再帰する《わかる（っている）気がする》問題。もしかしてこれから先も、本当はよくわかっていないのかもしれないのになんだか漫然とわかった気になっているこの〈わたし〉をひきずって、人生の峠を登り坂道をそろそろとなるべく邪魔にならないように下っていくのだろうか。この覚束ない〈わたし〉という乗り物で？

いや、違う。問題の根はそんな先にあるのではなく、この〈わたし〉でもう随分と長いこと“やってきてしまっている”という方にある。ガラス窓に映るヒトの顔を瞬時に〈わたし〉だと判断するだけでなく、それが見慣れた〈わたし〉であることに安心を覚えることを避けられない、強固な同一性の鎖。この〈わたし〉を離れた別のやり方を知るべくもない途方もなさ。窓に映るじぶんの姿がゲシュタルト崩壊を起こしたらどんな感覚なんだろうか。そんなあいまいで不確かな自己を、だからもっと丁寧理解する必要がある（のかもしれない）。

似て非なるもの、というのが世の中にはたくさんある。たとえば「追求」と「追及」と「追究」。じぶんを理解していくための“ツイキユウ”は、どれが正しいだろうか。いや、これを書いている〈わたし〉のにとってはどの意味がいちばんフィットするだろうか。幸福の「追求」と、幸福の「追究」では意味が異なる。スマートに説明できたら知的には見えるだろうけど、両方の意味を理解することで〈わたし〉自身がなんとなくやってる（つमりの）“ツイキユウ”が実はどっちに近いのか

を考えたり、そこを足がかりにして「じゃあほんとにツイキユウしたいのはなんなのか」を言語化することで問いかけてみるの方が、本来はよほど知的な振る舞いだらう。

「追求」は手に入れようと粘り強く追い求めること。「追究」は不確かなことや不明なことをどこまでも研究すること。考えきわめること。哲学対話は、なにかを「追求」してる現象と「追究」してる現象が交差する場でもある。そこにじぶんを晒すことで、まだ知らない〈わたし〉が顔を覗かせることもある。そうでなければまだまだ省察が足りていないということ（のかもしれない）。

厚労省は1月17日に「第4回 人生の最終段階における医療の普及・啓発の在り方に関する検討会」*1を開き、「人生の最終段階における医療の決定プロセスに関するガイドライン」(GL)とその「解説編」の改訂案を示した。人生の最終段階の医療について患者本人や家族、医療従事者などがくりかえし話し合う「アドバンス・ケア・プランニング」(ACP)の重要性を強調することを主な観点の一つになっている。厚労省は平成27年3月、「終末期医療」という言い方から「人生の最終段階における医療」という言い方への切り替えを決定した。終末期医療という表現に伴うネガティブな、そして“まだじぶんには関係ない”という他人事イメージを払拭し、誰にも等しく共通する事柄としての包括的な体制作り(地域包括ケアシステムなど)を進めている。

人生の最終段階における医療やケアをどうしたいのかという具体的な要望が、死が近づくことによって自ずと明らかになるものかどうなのかは専門外なのでわからないが、しかし切実かつ喫緊の重要事項についてよくよく話し合うことの意義深さは、対話の場の末席に名を連ねる者としてはさしたる違和感なく同意できるものだ。個人の尊厳や想いを尊重し、その生を全人的(身体的苦痛、精神的苦痛、社会的苦痛、スピリチュアルペインを総合的に包括する)にケアしていくことは本当に尊いことだとおもう。

振り返っていまの〈わたし〉は、じぶんの人生でここまで“ツイキユウ”してきたものがなんだったのか、なにを理解できたのか——それらがじぶん自身を深く理解することにどの程度寄与してきたか——を、いったいどの程度わかっているだろう? バスルームの鏡に映るのがまぎれもなく〈わたし〉だということはわかっても、(性欲とかの欲求は別にして)その内面にどんな想いが狂奔し、思考がトグロを巻いてうねっているのかは、わかっているようでやっぱり“なんとなく”の域を出ない。でもスタートは切られているのだ。そこに向かって。

べつにわからなくてもいいという選択肢もあるだろうし、“ツイキユウ”も必須ではないとおもう。でも、「弱音が吐けず、目標達成のルールで自分をしばりがち」で「固く自分の感情を閉ざし」がちであるらしいこの〈わたし〉は、そうする方を **much better** (例のおばちやまならモアベター) と考えているような気がするのだ。なんとなく。ザ・スパイダースならそれだけで幸せなんだろう。

でも手間がかかることにだけ宿る味わい深さというものが確かにある。先に挙げた検討会とそのGLのなかでも、「意思は変化し得るものであり、医療・ケアの方針についての話し合いは繰り返すことが重要だ」と強調されている。繰り返しを倦まず、何度でも問いに立ち返ればいいのだ。洗面台の鏡に映った顔なじみが小さくつぶやく——「よし。もう歩き出している。」。この気分をどこかに書き写しておこうかなという考えがよぎり、そこでふと疑問が浮かぶ。「ところで「写る」と「映る」ってなにが違うんだろう？」

*1): 第4回 人生の最終段階における医療の普及・啓発の在り方に関する検討会

<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000191281.html>

【ご案内】

「さろんラボ」ではみなさんのやる気とアイデアを募集しています♪

名称：【さろんラボ】

コーディネーター：【大村】

「さろんラボ」、常設しています。このさろんラボではみなさんの「やってみたい」を核に、「さろん」を触媒にして、どんな化学変化が起きるかを試みる場所です。
さろんラボは当面継続して設けていきます。

さろんの参加者の手で、以下の2つのイベントがうまれました。

【さろんラボ 001】 「あたまの中を散歩するてつがくカフェ」

<http://sanpo-tetsugaku.jimdo.com/>

【さろんラボ 002】 「哲学カフェ Ante-table/アンティ・テーブル」

<http://ante-table.wix.com/ante-table/>

既存の哲学カフェのカタチに限定せず、みなさんの中で温まっている関心ごとやご興味を添えて、どうぞお気軽に下記までご連絡下さい。みなさんとの新しい化学変化を、スタッフ一同心から楽しみにしています。

▽詳細はこちらまで

salontetsugaku@gmail.com (担当：大村)

【2】

コトバをハーバリウムする #28 (クスノキ)

本のコトバから

お前はまるで写真に放った火のにおいを吸い込むように思い出を噛むんだ。
思い出が真っ黒になるまで燃やすんだ。
今日私といたこともこの夏の夕空も、
お前の思い出となるのだろうか。

——阿部共実『月曜日の友達』

歌のコトバから

悲しみの裏側で 高鳴る笑い声に
こみあげる虚しさも 風に吹かれて消える

灰色の 水曜日よ

——ARB『灰色の水曜日』（作詞：石橋凌、白浜久）

【4】

さろんアーカイブの遊歩道 #22 （ネムノキ）

カテゴリ：【さろん哲学 議事録】 第6回、第53回

テーマ： 「大人とは」 「大人」

開催日： 2011年2月11日、2015年1月17日

http://salon-public.com/wp-content/uploads/2013/01/salon_giji_06.pdf

http://salon-public.com/wp-content/uploads/2016/12/salon_giji_53.pdf

私は大人だろうか、と時々考える。大抵、答えは否だ。年は重ねたものの中身がてんで伴っていない、成人とは名ばかりの未熟者だ。でも年の数でないとしたら、何を基準にして大人かどうか審査しているのだろうか？

多分、心の中に「大人とはこうあるべき」というイメージがあって、それと自分とを比べているのだ。では、その鋳型はどんな風に作られたのだろうか？ 「大人」という心象の材料になっているのは何だろうか？

きっと土台にあるのは、幼い頃に感じた養育者の頼もしさや優しさだ。子供の自分にはない生活面の能力。それから、年上の人たちの世慣れた態度、ものの分かった振る舞いかもしれない。学校の先生の、威厳や博識。そして多くの職業人が見せる、自らの仕事に習熟して落ち着き払った様子なども、幼い心に「大人」を強く印象づける要素だろう。

非力で五里霧中の成長期に出会った沢山の年長者から（いいとこ取りで）抽出した大人像、それは実のところ非現実的な理想なのかもしれない。そんな出来過ぎた人物像をおのれに課しながら実情に目をやると、等身大の自分はいつだってひどく子供じみて映る。

でも、こんな私でさえ年若い人には人生の先輩と見えるのだから、年嵩らしくしっかりしなければ、と思う。そうやって幼い時分に仰ぎ見た大人の姿と、今の自分に向けられている（かもしれない、と想像する）年少者からの眼差しの両方が、「大人になれ」と私に迫る。それはしんどいけれど、人間の成熟に必要なことなのだ、と思う。（…そうとでも思わなきゃ、オトナなんてやってられない。）

編集後記

メールニュース第109号をお届けします。

こんにちはフクロウです。ホウ。

きのうはバレンタインデーでしたね。

フクロウの会社でもお菓子コーナーにチョコが置かれていました。

月初に「義理チョコはやめよう」という新聞広告をチョコレート会社が出しましたよね。

電車に乗ったら女子高生が「義理チョコなくなったら好きなひとにチョコ渡せなくなっちゃうじゃんね」と話しているのが聴こえて、なるほど本音と建前にはやっぱり奥深いものがあるなあと感じました。

もしかするとお菓子コーナーに置かれていたあのチョコも、超ベテランパートの山崎さんの本命なのかもしれません。(誰にやねん！)

チョコと言えば

フクロウはホワイトチョコレートが大好きで、板チョコはもちろん、ダースの白とか小枝とかを昔から愛食していました。

大人になるまで知らなかったんですよ。ホワイトチョコレートにはカカオがはいってないって！

「嘘だ！」「だって黒くないじゃん。白じゃん」

しれっとチョコレートを名乗ってるけど、チョコレートではないなにか。。。

今週土曜 17 日に開催するサロン哲学のテーマは「誠実さ」です。

いったいなにが誠実さを決めてるのでしょうか。

みなさんとじっくり、存分に話せるのを楽しみにしています。

それではまた次号でお会いしましょう。ホウ。

編集: (フクロウ)

サロン | Mail News 2018/2/15

⇒次号 (3月1日発行予定)

サロン Mail News 第 109 号 / 2018 年 2 月 15 日発行【読み物号】

編集・発行：サロン

salontetsugaku@gmail.com

<http://salon-public.com/>

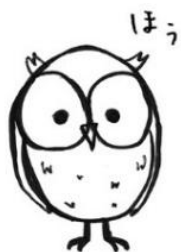
<https://twitter.com/salontetsugaku/>

<https://www.facebook.com/salontetsugaku/>

-
- ◇ 「サロン」にお知らせいただいたお名前・メールアドレスなどの個人情報は、当会からのご案内のためだけに使用いたします。
また、ご本人の同意なく第三者への提供はいたしません。
 - ◇ 「Mail News」の無断転載はご遠慮ください。転載ご希望の場合はご連絡願います。
バックナンバーは HP からご覧いただけます。
 - ◇ 【Twitter】 <https://twitter.com/salontetsugaku/>
 - ◇ 【Facebook】 <https://www.facebook.com/salontetsugaku/>
 - ◇ 【ホームページ】 <http://salon-public.com/>
 - 「サロン哲学」 Web サイト <http://salon-public.com/tetsugaku/>
 - 「朝サロン」 Web サイト <http://salon-public.com/asa/>
 - 「サロン工房」 Web サイト <http://salon-public.com/koubou/>

「あるばか学校」 blog

<http://alpacagakkou.blog.fc2.com/>



"copyright (c) 2011-2018 さろん. All rights reserved."
